

現代日本幻想文学のユートピアと反ユートピアの概念 ——安定へのなつかしさ——

The Concept of Utopia in Modern Japanese Fantasy:
Nostalgia for a Lost Stability ?

Susan NAPIER*

Western reference works on utopias assert that utopian literature does not exist in Japanese and Chinese culture but, although possibly true in terms of premodern literature, this is certainly not the case from the Meiji period on. This paper examines four works of modern literature with utopian themes. The works are Miyazawa Kenji's "Ginga testudo no yoru," Ishikawa Jun's story "Tora no kuni", Oe Kenzaburo's 1979 novel *Dojidai gemu*, and Inoue Hisashi's 1980 novel *Kirikirijin*. Despite the many important differences among the individual works, they also possess a number of intriguing similarities, the most important of which is the preoccupation with action or movement, in terms of both narrative structure and theme. At least three of the works play on revolutionary motifs and all four of them emphasize the contrast between outsider and insider. This preoccupation with change and movement is probably partly due to the four writers' common role of outsider in relation to Japanese society, but is also, no doubt, an outgrowth of various political influences

* テキサス大学助教授。現在お茶の水女子大学研究員

such as the belief in progress on which the Meiji Restoration was based, and the twentieth century writers' concern with revolutionary Marxism and anarchism. The relative absence of anti-utopian novels in modern Japanese fiction is also interesting to note, suggesting an unexpected sense of optimism among even the most politically aware writers.

この発表のタイトルは「ユートピアと反ユートピア、安定へのなつかしき」となっていますが、皆様は私の発表をお聞きになった後では、タイトルの最後に疑問符をつけた方がよかったとお考えになるのではないかと思います。つまり西洋でも東洋でもユートピアという言葉には、伝統的に大体、静かで安定的な社会というイメージが強く感じられるのです。しかし驚いたことに、日本の近代文学を読むと、ある程度安定へのなつかしきはあるけれども、それと同時に安定から解放されたいという欲求もかなり見られるのです。

ユートピアとか反ユートピアとかいうかなり幅の広いトピックについて御説明したいのですが、先ずユートピアの意味について少し考えてみたいと思います。「広辞苑」には、ユートピアの定義は意外に簡単に書かれています。要するに「トーマス・モアの作品に基づく想像上の理想的な社会」ということです。「理想的な社会」とは非常に抽象的な概念なので、どこにでも見つかるし又どこにも見つからないと言えるでしょう。

しかし驚いたことに、私がユートピアについて研究し始めてから西洋の評論家の本を読みますと、日本文化或いは東洋文化全体にはユートピア思想はないという結論が度々現われて来ます。その結論は何に基づいているか考えてみますと、すぐ重要な事実二つに気がつきます。一つは大変狭い意味のユートピアから出て来た考えで、つまりユートピアはどうしても文学的な概念であって、日本文学をいくら探しても、いわゆるユートピアの小説などは一冊もないということなのです。もう一つは宗教に基づいたもので、つまりユートピアの概念はJudeo-Christian道徳、要するに人間の状態を今の世の中で

改良することができるという信念と深い関係があるので、こういう信念のない東洋社会には、ユートピア思想が生まれないのは当然だという考え方です。人間の状態を改良するという夢はJudeo-Christianityだけに可能であると考えるのは、大変疑問に思いますが、やはり日本の近代以前の文学を見ますと、完全なユートピア的作品はほとんどないと言えると思います。浦島太郎の海の中の龍宮は、ある程度理想的な所だと言えますが、そこはただ食欲や快楽を満足させるだけで、西洋のmärehenおとぎ話のCockagneの国と同じようにサブ・ユートピアに過ぎません。江戸時代の作品になると平賀源内の「風流志道軒伝」という空想旅譚の例が上げられますが、「風流志道軒伝」はユートピアを描くというより、「ガリバー旅行記」のように幻想の国を使って、社会諷刺を試みた作品だと言った方が正しいと思われます。

勿論、食欲を満足させたり社会を諷刺したりすることも、ある程度ユートピア小説の役割と言えますが、今申しました例には人間を改良するというユートピアの主な役割は少しも見出せません。そういう道徳的な考えが東洋にもあったという事実は否定できませんが、それは文学よりむしろ儒教の4 Sage kingsのGolden Age伝説にみることができます。しかし今の世の中とは全く隔絶しています。

一方明治以降の文学を読むと、日本の評論家でも充分ユートピア的であると認める作品がかなり多く出て来ます。本日の発表では、その近代文学に於けるユートピア小説の特徴について、お話ししたいと思います。ユートピアの反対いわゆるディストピアについても少し触れてみたいと思ったのですが、研究の間に安部公房を除いてはディストピアといえる作品をあまり見つけることが出来ず、このディストピアの不在ということも一つの興味深いテーマになると思いますが、今日の所は時間の都合もあり、ユートピアのみにしぼってお話ししたいと思います。

やはり一言でユートピア小説と言っても色々変化に富んでいますので、初めにそれらに於ける共通点を述べてみたいと思います。

伝統的な東洋的Golden Ageの静かで安定した社会に対する夢と比べて、近代日本のユートピアはおおむね、対立や無秩序、少くとも「動き」や「行動」の存在に価値を置くことが前提になっているのが私にとって一番目につく点です。それにこれらユートピアの住人は、Sage Kingsとかトマス・モアの哲人とは全く違って、乞食・人外たまには子供達等、つまり一般社会から亡命した人達が多いのです。要するに近代日本のユートピアは、安定感を強調するより不安定感を強調している、と言った方が正しいようにみえます。

明治の始めから現在までのユートピア的小説を概観しますと、色々な例が上げられます。明治時代の政治小説から最近の「帝都物語」まで、それぞれに面白い小説が現れています。しかし時間の制約のため、特に四人の作者とその作品だけに、重点を置いて考えてみたいと思います。

今日取り上げる作品は宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」、石川淳の「虎の国」、大江健三郎の「同時代ゲーム」それから井上ひさしの「吉里吉里人」の四作品です。この四冊は勿論それぞれ違った性格を持っていますが、四冊ともすべて現実の世の中とは離れて、理想的である程度 pastoral的田園的な世界のビジョンを読者に与えます。そしてその新世界のビジョンは、現実世界の欠点を照らし出し明らかにしています。今述べた性格は、この四冊に限らずどんなユートピア小説にも当てはまるものですが、この四つの作品のもう一つの大きな共通点は、更に興味深いものと思われます。それは先に申しました行動と対立のことです。二十世紀までの西洋のユートピアについて考えますと、大部分のユートピアの世界は前から出来上っていたもので、例えば、モアのユートピアとか、ウィリアムス・モリスのニューズ・フロム・ノウホエアのように、対立のもとに出来ているのではない安定したものです。それらと比べると日本近代文学に於けるユートピアは、大体実現しにくかったり、たまには革命的であったりする一時的な世界です。少し大げさに言えば、日本のユートピア小説は、完成されたユートピアそのものを描くより、そのユートピアに到るまでの過程を強調する方が一般的だと思います。

その過程をもっと具体的に理解するために、作品の方をもう少し詳しく取り上げたいと思います。

まず宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」から始めたいのですが、ここに出て来るユートピアのビジョンはごく初期のもので、非常にあいまいでおとぎ話に近いと考えていいと思います。「銀河鉄道の夜」のタイトルが暗示するように、物語の構造そのものが幻想的な汽車の旅に基づいています。

学校からも仲間達からも疎外された、貧しい家族の一人っ子の主人公が、ある夜突然幻の汽車に乗って全然違った世界に入って行ってしまいます。この新しい世界は、たしかに彼の住んでいる世界よりずっと美しく心やさしい所です。この物語では政治や社会については全く触れられていず、ムードが一番ユートピア的要素になっていると言ったらいいかも知れません。しかし主人公の旅が終ってもとの世界に戻った時に、その旅で見たような理想的な世界が、単に天国とか夢物語ではなくて、今の世の中でも実現可能であり、又そうしたいというメッセージを読者が受け取ることが、多分この物語の中の最もユートピア小説に近い要素だと言ってもいいと思います。そのユートピアをどういう風に変現できるかはそれほど詳しく書いてはありませんが、やはり物語によく登場するいく人かの先生のことを考えますと、教育を受けることが重要な方法の一つだと思わずにはいられません。主人公の持っているどこにでも行ける特別な切符も、やはり教育の一つのシンボルだと言えるでしょう。それから切符は又、もっと一般的なものも象徴していると思われます。それはつまり、行動とか進歩です。「銀河鉄道の夜」の基本的な構造とテーマは、その進歩です。つまり、前に進めば必ず良い結果が得られるという、非常に楽観的な考えに基づいています。

宮沢賢治の楽観的なビジョンでは、疎外されていた主人公がもう一度自分の社会に戻って、そこで精神的な進歩を続けるというハッピーエンドになっていますが、石川淳の大人向きでもっと暗いビジョンを持つ小説になりますと、ユートピアは現実の世の中ではなかなか実現しにくいようです。その中

で一番実現に近いユートピアは、恐らく石川の短編に描かれた「虎の国」だと言えるでしょう。

物語の世界を江戸時代に設定したいいわゆる「虎の国」は、浪人、乞食、犯罪者、芸人などの避難所です。けれどもモアの言うユートピアの意味に含まれるno placeつまりどこにもない場所と同様、「虎の国」は公式に認められた所ではなくて、ただ二つの藩の間の境に当る隠れ里にしか過ぎません。たしかに「虎の国」は幕藩体制とは違った制度を持っていますが、その政治制度についてはあまり説明されていなくて、ただある程度無秩序で、男女関係も比較的自由に見えます。「虎の国」のフリーな世界は、たしかにalternative(現実世界に代り得るもの)だと言うことができますが、あまりその時代の中央政府や権力を脅やかしたりしません。それに小説に於ける行動は、主に「逃げる」という受身的なものだけです。石川の晩期の作品「至福千年」という小説になると、行動が革命的になります。「至福千年」の主人公達は、石川淳のいつもの好みと同じく社会から疎外された人々ですが、この作品に置いて彼等はいわゆる人外・乞食等のアウトカストだけではなくて、隠れキリシタンの信仰のもとで活躍している人々です。しかしキリシタンの間に対立的な行動の流れがありますから、結局革命は失敗に終わってしまうのです。

権力のない人々と権力のある中央との戦いは、大江健三郎の問題作「同時代ゲーム」に於いては、一つの重要なテーマになっています。しかし大江健三郎の作品では、この中央とアウトカストの対立は、もっと幅の広いもので、小説の構造は、大きな円がだんだん小さい円に収斂されて来るように、小説が中央権力を持つ国から遠く離れたメキシコに始まり、やがて語り手の生まれた小さい四国の村＝コスモス＝小宇宙に終わります。この四国の村は色々な面から見て、ユートピアの要素を持っています。幕藩体制から離れて、二十世紀まで独立を保ち、独特な伝統や習慣を守っています。この隠れ里は、たしかに現代日本社会とは異なる秩序と価値観の社会、alternativeを表すと同時に、現代日本の抱える問題を諷刺し、又批判しています。

秩序が固定化している日本社会と異なり、大江健三郎の村の政治制度はかなり自由に変更されます。というのは、村人が時に自分の家を捨てて他人の家に移らざるを得ない状態が起ったりして、秩序はいつもかなり流動的です。大江健三郎に独特なペテン師やグロテスクの解放的力を信ずることから、この無秩序の価値が生れていますが、社会から追放されこの四国の谷に隠れている人々は、石川淳の「虎の国」の住人にも似ています。けれども石川淳の主人公達が、権力から逃れたり、隠れたり、かなり受身的な行動を取っているのと違って、大江健三郎の村の人々は色々な面で中央の権力者に強力な反撃を加えます。「同時代ゲーム」の主人公達の一番効果的な攻撃は、武器に頼るよりユーモアによるものと言っても言いすぎではないと思います。例えば小説の最後の三島神社事件で、語り手の父＝神主が、奇妙な恰好と振舞で帝国主義をこっぴどく諷刺する場面が特に印象に残ります。

「同時代ゲーム」のユーモアは時に分りにくいことがあります、作品の主なメッセージ、つまりこの様に小さい隠れ里が、ユーモアやペテン師的戦術を使って権力者と戦えるのだという事実が、井上ひさしの「吉里吉里人」という素晴らしいユートピア的小説を生む基本的な前提になっているのはたしかだと思います。

今、私がここで「素晴らしい」という形容詞を使った理由を説明しますと、私が研究して得た限りの知識では、日本現代文学の中で吉里吉里国ほど完璧なユートピアはないと思うからです。移動するバスの中で政治を行なっている国会議事堂車が象徴するように、この小説では上から下まで行動的であり、現代社会のあらゆる面にコメントを与えています。政治・教育・男女関係・農村・医学・法律・芸術など「吉里吉里人」は近代社会のほとんどすべてについて、一方では諷刺し、他方では新鮮なalternativeを読者に与えています。それにこのalternativeであるユートピアが、驚くほど非常に具体的にテキストのページの上に実現されています。宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」と同様に、物語は電車の旅から始まりますが、宮沢賢治のあいまいで美しい天国

的な世界に比べて、この井上ひさしのユートピアは、東北の大変現実的な村に設定されています。それにこの村の独立運動も大変リアルスティックに描かれていて、その具体的なリアリズムのもとで井上ひさしは、期待通りに非常に魅力的なユートピアを創造したのです。

これまで、日本現代文学に於けるユートピアの小説を瞥見したにすぎませんが、それらの作品の中に於けるユートピアの特徴を、ここで要約してみたいと思います。ごく一般的に言えば、これらの作家達は、ユートピアに対していくらか暗い面を認めていたとしても、人間がこのままの状況を易々諾々と受け入れずに、より理想的なものを求めて行動を起こすやり方の方に、信頼を置いているということが言えるでしょう。しかしその行動は、結局はどういう意味を持つのでしょうか。

井上ひさしと対談した時に、由良君美が次のようなことを言っています。「優れたユートピア小説は、みんな転倒の論理を持っていて、大抵は現実をひっくり返している。」この「転倒の論理」は、私が強調した行動的であることと大変似ています。しかしその行動は最終的になぜ必要なのでしょう。

このいわゆる動きは、小説の構造から見て、ある程度構造上のrequirement(要求、必要性)に基づいています。つまりユートピア文学は、大体幻想文学の中の一つのジャンルと言ってもいいのですが、そのジャンルの一番基本的な形はquestつまり目的のある旅だからです。その目的には例えば、知識・自由・金銭を求めるなど、色々ありますが、その目的そのものが物語を動かします。

しかし物語の構造から離れて考えると、又別の興味深い説明も可能になると思います。まず作者の心理的な面から考えますと、今まで取り上げた四人の作者は、皆どちらかというと中心から離れたoutsidersだと言えるのではないのでしょうか。宮沢賢治と井上ひさしは二人とも東北に生れ、大江健三郎は四国の人です。石川淳だけは東京生れですが、政治や宗教に対する興味は非常にoutsider的なものです。石川淳は大江健三郎と同じようにマルクス主義に

興味をおぼえ、又、宮沢賢治の信じていたキリスト教にも興味を持っています。この四人のoutsiders的作家の作品にはやはり、中央権力と戦ったり社会から疎外されたりしている主人公が多く登場するのは当然のことでしょう。しかしここで疑問として出て来るのは、なぜ読者がこれらの小説を読むのかということです。やはりこの疑問には、日本の社会や歴史を詳細に検討してから答えなければなりません。

明治時代から今までの日本の社会は、変化の速さが外国人の目から見て最も顕著です。鷗外・漱石等の純文学を読むと、この変化は彼等にとっては別に喜ぶべきことではなくて、むしろ恐るべき傾向ですが、大衆の方はだんだんその変化を歓迎するようになって来ました。

レトロっぽい銀河鉄道を利用して行くユートピアを描いた、宮沢賢治の進歩へのナイーブな信仰から始まって、井上ひさしの描いた新幹線で行けるハイテクの病院を誇っている吉里吉里国に到るまで、ずっと進歩はイコール価値あるものという考え方の流れが見られます。

大江健三郎や石川淳はその作品の中で、進歩に対してもっと複雑な態度を取っていますが、両者とも傍観者であるよりは行動者である方がはるかに望ましいと考えている印象を強く与えます。

文明開化の頃の明るい未来への約束は、現代日本のユートピア意識の中に、まだその残照が認められると言ってもいいのではないのでしょうか。勿論、作家というものは、皆それほどナイーブではありません。マルクス主義やキリスト教から影響を受けてoutsider意識があっても、ユートピアを百パーセント信じることはできません。

宮沢賢治の作品の中でも淋しさが描かれ、石川淳のユートピア主義者も時々失敗し、大江健三郎の隠れ里にむごたらしい事件が起こり、吉里吉里国の独立は失敗に終わります。しかしそういう矛盾があっても、主人公達が夢見た社会は現在の社会よりずっと良いという印象から逃れられません。

矛盾について話しますと、最後に安定感のことにちょっと戻りたいと思い

ます。

私が先ほどからお話してきましたように、四つの作品には皆、ある程度pastral的な要素が見られます。宮沢賢治とか石川淳の場合は、多分小説の背景になっている時代と関係があるのでしょうか、大江健三郎や井上ひさしの場合になると、その小説の舞台を田舎に設定するということには、大変象徴的な、又もしかするとイデオロジカルな意味があるかもしれないと思います。その物語のradicalで反権力的な立場が、このことに対する一つの説明になっています。つまり今の世の中で革命を起こそうとすれば、墮落した大都会から離れて、むしろ田舎の方から始めなければならないという、中国の指導者毛沢東の考えです。しかし別の大変保守的な説明もできます。大江健三郎や井上ひさしが創造した田舎の村は、現代社会にはどうしても存在が許されません。やはり両方とも、子供時代の経験に基づいたpastral田園的な世界です。しかし今の日本の進歩のためには、どんなになつかしくても、どうしてもあの時代や世界に戻ることはできません。行動するよりほかはないけれど、いくら行動しても、なつかしい田舎のユートピア的世界にはもう戻れません。この非劇的な矛盾は、日本近代文学のユートピアの概念を制約することにもなりますが、又一方では、豊かなものにすることもできます。

討議要旨

楊永良氏から、西洋のユートピア概念はどういうものであるかとの質問があった。発表者は、教会とかかわるユートピア、社会主義の影響から生れたユートピア、科学信仰が作り出したユートピアの、三つのユートピアに分類して説明された。座長アラン・ターニー氏は、イギリス社会の現実に対置されるものとしてユートピアは考え出された一面もあると、発表者を補足して説明された。楊氏はさらに、キリスト教以前のユートピアについて質問され、発表者は、プラトンをあげて答えられた。